

研究指定名：スピーキング・リッスン・ラージ・MSK-1

学校名：県立岡山城東高等学校

校長名：入江 泉

所在地：岡山市下110

電話番号：(086) 279-2005

研究担当者：小橋 雅彦

1 学校の概要

(1) 学校の特徴

生徒一人ひとりの興味・関心・進路などに基づいた効果的な学習ができるよう、普通科の中に人文系・理数系・国際系・音楽系の四つの系を設けている。そして、各系にふさわしい多様な科目の中から、生徒の希望を生かして自由に選択ができるよう工夫されている。

(2) 学校概要

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	324	8	358	9	355	9	1037	26

(3) 学校の学習意欲・学力向上に関するこれまでの取組

本校では、生徒一人ひとりが進路に応じた効果的な学習ができるよう配慮した教育課程の在り方を研究し、編成してきた。

第1学年では、各系に進むための基礎として、共通科目を中心にしたカリキュラムを編成している。そして、第2・3学年では、各系の特色をなす指定科目を設けるとともに、各学年とも履修科目の約30%を選択科目に当てている。

(4) 教育課題

本校に入学を希望する生徒、中でも国際系を希望する生徒は、本校の英語教育に対して大きな期待を抱いて入学してくる。とりわけ、「英語で意志疎通が図れるようになりたい」など、発信型のコミュニケーション能力の習得を強く希望している。このことは、平成14年度2年生国際系(80名)、平成15年度2年生国際系(67名)、1年生国際系推薦入学生徒(35名)に実施したアンケートに対する回答において、大多数の生徒が「英語学習」に関して「楽しい」、「興味がある」、「もっと上達したい」等の気持ちを抱いている一方で、日々の授業に関しては、「もっと英語を話す授業を増やしてほしい。」「英語をもっと日常言語として扱ってほしい。使う場面がまだ少ない。」という感想からも裏付けられている。

さらに、新学習指導要領においては、これからの国際社会に生きる日本人を養成するという視点のもとに、実践的コミュニケーション

能力の育成が強調されている。すなわち、外国語の学習を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成の重要性が述べられている。

これらに対して、本校では英語教育に関して様々な取り組みを行ってきたが、従来から行ってきた「読む」「聞く」というインプット面の指導改善に加え、さらに「話す」「書く」というアウトプット面に関する指導の改善、とりわけ言語の使用の機会を増やすなどして、「英語で意志疎通が図れるようになりたい」など、発信型のコミュニケーション能力の習得を強く希望して入学してくる生徒の期待にこたえられるようにすることが、本校の英語教育の課題であると考えた。

2 研究の概要

(1) 研究主題

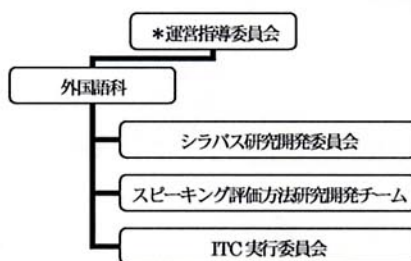
「英語教育における発信型コミュニケーション能力育成方法に関する研究」

(2) 研究のねらい

本研究は発信型のコミュニケーション能力を育成するために効率的かつ体系的なシラバス開発を行うと同時に、発信型のコミュニケーション能力を評価する方法について開発を行うことである。

そして、研究開発を行うことによって、卒業時には、身近な論題について論題提示後数分で自分の意見をまとめディベートができたり、身近な話題についての自分の考え・意見を述べた100語程度の英文がすぐに書けたりするような英語力を身に付けさせることが目標である。

(3) 研究組織



*運営指導委員会：県教委が設置し、教育委員会、研究指定校、大学関係者の3者から成る組織で、研究の過程において指導・助言にあたる。

(4) 3年間の計画

① 1年次(平成14年度)

第1年次は、発信型コミュニケーション能力のある学習者育成のための方策を探ることを目的とした。その結果本研究では、効率的

かつ体系的なシラバスと、評価方法の研究開発を行うこととした。さらに、情意的側面の改善が行われたかどうかの検証も行うこととした。

② 2年次（平成15年度）

第2年次は、前年度の研究の方向性を受け継ぎ、「観点別評価を考慮した体系的なシラバスの作成」「学習形態・学習内容面における情意面・態度面の測定及び測定方法の開発」を柱として研究を開始した。また、校内組織として、「シラバス研究開発委員会」、「スピーキング評価方法開発チーム」を新たに設置し、上記の研究開発を進めていくこととした。

③ 3年次（平成16年度）

第3年次（本年度）は、2年間にわたる研究の過程・成果の総括を行うとともに、実践による検証を行う予定である。

3 年度ごとの取組

(1) 研究の実際（1年次）

シラバスの研究開発については、英語能力全般の改善を図るために、まず3年間で身につけさせたい英語力（目標）を設定することにした。その目標達成のためには、各科目の目標が有機的に統合される必要がある。この統合化のために、各科目の具体的な目標（期待値）を設定し、全般的英語力改善のための各科目の果たすべき役割を明らかにすることとした。また、目標達成の状況を把握するために、各科目の目標に準拠した評価規準を作成し、観点別評価を行うことを計画した。

また、情意的側面の改善については、学習者個人とその情意的特質との関連性について知る必要があると判断し、「アンケート」と「パフォーマンス（スピーキング）の測定」の2点から検証を行うこととした。

この検証においては、学習者個人とその情意的特質との関連性を知るために、アンケート項目と言語能力との相関より、より精度の高いアンケートの開発を目指した。

また、情意的側面の改善がなされたならば、4領域全てにおいてその変化が現れるという仮説をたて、本研究では、改善の変化をスピーキングのパフォーマンスの変化で測ることとした。

第1年次の研究は、本研究の中ではパイロット研究に位置し、第2年次からの本格的な研究の方向性とその具体的手法についての検討・準備を行うことに主眼が置かれた。

(2) 研究の実際（2年次）

運営指導委員会において、セルハイの研究目的は授業改善そのものであるとの示唆に基づき、「発信型コミュニケーション能力育成」に関わる活動の検討と、早急な実践を行うこととなった。

このことより、研究開発の焦点は、『各科目における「発信型コミュニケーション能力育成」に関わる活動の検討』、『生徒の英語力

を測定するための「スピーキング・テスト」の開発』に絞られ、より詳細な検討を加えた。

平成15年度（2年次）において、シラバスについては、「卒業時達成目標」、「各科目における短期達成目標」、「各科目における活動のまとめりごとの評価規準」等を作成し、これらを基に「発信型コミュニケーション能力育成」にかかわる学習活動を授業で実践している。また、スピーキング・テストについては運営指導委員の協力のもと、兵庫教育大学と共同開発し、2学期後半に1年生全員を対象に実施・分析した。

(3) 研究の実際（3年次）

作成したシラバス「学習活動と評価規準」をもとに本校外国語科共通の様式による学習指導案を作成し、実践・検証を行い、必要に応じて修正を試みることになる。つまり、定期的に総括し、シラバスの検証へとフィードバックする予定である。第二に、本校が兵庫教育大学と協同開発したスピーキング・テストを全学年で実施する。実施対象は国際系で、1年生のうち国際系推薦入学生徒と海外帰国生徒および国際系進学希望生徒も対象となる。第三に、情意的側面がなされたかどうかの検証をする。これについては、集積したデータをもとに質的分析を行うと同時に、改善の変化をスピーキングのパフォーマンスを通して測定する予定である。

また、ITC (Intensive Training Camp) については、本年度も実施予定であり、シラバスの中での位置づけをより明確にしていこうことになる。

ITC（英語で閉谷学校を案内）



(ディスカッション)



ITC (ALT とレゲエダンス)



ITC (人権問題を扱った英語劇)



4 研究に対する評価

(1) 研究の成果

ア 指導と評価のシラバス「外国語科 学習活動と評価規準」の開発

平成15年度作成の「指導と評価のシラバス」の成果として以下のことが挙げられる。

- ・ 各科目での学習活動の目標を設定することで、その学習活動の期待値が明確になった。
- ・ 長期目標達成に向かう、科目間の統合化が確認できるようになった。
- ・ 外国語科教員間で学習活動を共有することができた。
- ・ ITCの活動と各科目の学習活動との関連性が確認できた。

イ スピーキング・テスト

High school Oral Proficiency Examination(HOPE)®の開発

このテストの開発・実施により、生徒のスピーキング力の「観点別絶対評価」が可能となった。従来行っていたスピーキング・テストのような、学習した内容を再生させるといった「到達度評価」とは異なり、この開発されたテストでは、教師は生徒がどれくらい話しているのかについて「絶対評価」で理解することができる。また、その結果については生徒へフィードバックすることで、生徒は次に何をすればよいのかを知り、教師は授業で何を改善すればよいのか分かるようになった。

ウ ITCにおける情意面の改善

ITC は日々の授業中における様々な学習活動が集約される場であると位置づけられる。また、その場は教室という日常を離れて、ALT に史跡を英語で案内したり、英語で自分の意見を述べたり、他人と交渉したりといった英語を使わざるを得ない日常(authenticity)を経験する。このITCを通じて「自分の中のどんな面が向上したと思うか?」というアンケートに対して、「話そうとする積極性・勇気が出てきた。」「英語を話す壁が取れて、自分の意見が言えるようになった。」と述べた回答が多数あった。このことは、生徒が英語を使う体験(アウトプット)をし、英語を使う喜びの体験(情意的側面の改善)をするという重要な意義をITCが担っているということができる。

(2) 問題点および今後の課題

ア 指導と評価のシラバス「外国語科 学習活動と評価規準」の開発

開発したシラバスは、「卒業時達成目標」、「各科目における短期目標」、「各科目における評価規準」等の整合性・妥当性を検証しなければならない。そのために、このシラバスをもとに現在各科目において学習指導案を作成し、シラバスに示された学習活動および評価の実践をしているところである。

イ スピーキング・テスト

開発されたスピーキング・テストは本年度5月に全学年に亘って実施されたが、課題は評価者による評価の揺れである。絶対評価において評価の揺れはその精度・妥当性に関わる重要な問題であり、このことの解決に向けて現在検討中である。評価規準は共有できているが、評価基準をいかにして共有していくかが問題となる。グループ・モデレーションの在り方、評価方法そのものの在り方を検討していく必要がある。

ウ ITCにおける情意面の改善

アンケートの質的分析によりITCを経験することで「情意面の改善」がなされるであろうということは明らかになりつつあるが、そのことがスピーキングのパフォーマンスの中でどのように測定できるか、という量的分析が課題である。開発されたスピーキング・テストの評価結果とITC後に実施したアンケート結果、および同時期に実施した「英語学習についての意識調査」等の結果を踏まえながら検討を加える必要がある。